

国際結婚家庭で育つ「移動する子ども」の言語学習への「投資」の諸相
— 日中国際結婚家庭で成長した女性の視点から —
小幡佳菜絵(北京大学)

本研究は、日中国際結婚家庭で育った30代女性のライフストーリーに基づく、事例研究である。本研究の目的は、当事者であるAさん(仮名)が、「移動する子ども」(川上, 2021)という経験と記憶を描いたライフストーリーのなかで、国際移動と言語との主体的な関わりに、どのような意味を付与しているのかという、その主観的な意味づけの諸相を明らかにすることである。Aさんの経験と記憶は、幼少期から中国と日本を往来するという移動性や複文化性、そして主に中国語(北京語、共通中国語／普通话)と日本語という複言語性によって、特徴付けられる。本研究では、Aさんのこうした経験と記憶を「移動する子ども」として解釈した。さらに、上述の目的のもと、本研究では、次の2つの研究課題(RQ)を設定した。第一に、「日中国際結婚家庭で成長した研究参加者は、主体的な言語学習に関する自身の経験と記憶のなかで、何を転機として意味づけているのか」(RQ-1)である。第二に、「その転機が生じた背景要因を、言語学習の「投資」の観点から、どのように解釈できるのか」(RQ-2)である。

本研究では、ライフストーリー研究法を採用し、以下の手順でデータ収集と分析を行った。データは、2021年9月に実施した、日本語を主に使用した半構造化インタビュー(約70分)を中心に収集した。なお、この半構造化インタビューの前月、Aさんと研究者は、Aさんの経歴に関して、約120分にわたって、インフォーマルな形式で対話を交わしている。Aさんは、日本国籍の父と中国国籍の母の間に日本で生まれ、6歳まで日本で育った。6歳から12歳までは中国の北京で過ごし、小学校は母親の意向もあり現地の日本人学校に通った。その後、中高を含む8年間を日本で過ごし、20歳のときに大学進学のために再び中国に戻った。インタビュー実施当時も、北京在住であった。分析は、「投資モデル(Model of Investment)」(Darvin & Norton, 2015)を構成する6つの観点のうち、「ポジショニング」《統制の体系的なパターン》《アフォーダンスと認識された利益》という3つに特に着目し、Open Coding(日高, 2019)を用いて進めた。

主な結果は次のとおりである。RQ-1に関しては、Aさんは、20歳のときの中国移住と大学進学という主体的な選択を「転機」として捉えており、大学進学にあたっては、中国語学習をその目的の中心に据えていた。また、この「転機」の背景要因を問うRQ-2に関しては、Aさんは主に次のように捉えている。(1) 第一に、Aさんは幼少期から複言語環境で育ったものの、家庭内では「70～80%は日本語」であり、「(中高を含む)日本にいた8年間は中国語を使う機会」が限定的であったために、「中国にゆかりがあるのに中国語が話せないのが嫌になった」と語る。総じて、「自分は日本寄り」という自己再帰的な《ポジショニング》が、「転機」の背景要因のひとつとして影響している様子がうかがえた。(2) 同時に、中国にルーツがあることと、中国語(特に普通话)という言語資本の獲得が、当事者において規範として結びつくという、権力性を帯びた《統制の体系的なパターン》の影響もうかがえた。(3) また、大学進学や中国語学習への「投資」の意思決定においては、日中国際結婚家庭という家庭環境や、幼少期に中国で暮らした経験が、行為を促す《アフォーダンス》として機能していた可能性が示唆された。さらに、中国語への「投資」は、Aさんにとって中国現地の友人たちとの「本当の輪」への参加を可能にするための手段でもあり、社会関係資本への転換を可能にする《認識された利益》として、同時に意味づけられていたことが示された。このように、本研究では、日中国際結婚家庭で成長した当事者のライフストーリーを基に、国際移動を伴う主体的な言語学習における「転機」とその背景要因を、「投資モデル」の観点から分析した。総じて、日中国際結婚家庭で成長した当事者の主観的な意味づけを基点とした事例分析を、文脈とともに示した点に、本研究の独自性と新規性があると考えられる。

参考文献

- 川上郁雄(2021)『「移動する子ども」学』くろしお出版
日高友郎(2019)「オープンコーディング(open coding)」サトウ タツヤ・春日秀朗・神崎真

実 (編)『質的研究法マッピングー特徴をつかみ、活用するために』(pp. 72-79)新曜社
Darvin, R., & Norton, B. (2015). Identity and a model of investment in applied linguistics. *Annual Review of Applied Linguistics*, 35, 36–56. <https://doi.org/10.1017/S0267190514000191>